

清河八郎 「西遊草の道」

「元気・まちネット」踏査同行記

3

庄内町清川出身の幕末の志士・清河八郎が1855(安政2)年、母を連れて全国を旅した際の日記「西遊草」の県内ルートを探る東京のNP O法人「元気・まちネット」(矢口正武代表)戸沢村出身の踏査隊は、同町田谷を出て鶴岡へ向かった。

昔の松山街道に近いルートをたどり、田谷から同町西袋、鶴岡市八色木を通過。同市藤島で清川街道との分岐点を示す「松山街道追分石」を見つけた。古い石に「向鶴岡 左松山 右清川」と刻まれているのを確認し、ここから清川街道の踏査を試みた。

江戸時代に清川街道は江戸街道とも呼ばれ、鶴岡から江戸へ行く最も主要な道路だった。庄内藩主が参勤交代で江戸に上るには、鶴岡から清川までは陸路で、清川からは船で最上川を上り、大蔵村清水で上陸して再び陸路を進んだ。

追分石から数百m南下した辺りに、かつては藤島御茶屋があった。本陣とも呼ばれ、藩主が参勤交代や鷹(たか)

江戸期、別の道中記

浮かぶ 周辺の人間像



三井清野の道中記を見せてもらう踏査メンバー＝鶴岡市



清河八郎の母亀代は、どんな人だったのだろうか。岩波平の小説「回天の門」には、八郎が遊女だったお連を妻にする際、反対していた両親を政代が説得したことが描かれている。政代の夫弥兵衛は、学者になろうと家出した江戸で所持金を使い果たしてしまった八郎を助け、その後一緒に京都、大阪、岩国などを旅行した。その

狩りをした際に休憩、宿泊に使った。1872(明治5)年、松ヶ岡開墾場に集会所兼事務所として移築され、今は跡形もない。このあと隊員らは渡前、大半田などを經由して鶴岡市中心部に入った。

八郎の生涯を描いた藤沢周文庫版「西遊草」には、鶴岡荒町の富商二井弥吉の二女とある。実家は長女の政代が婿を取って家督を継いでいた。亀代が八郎と伊勢参りの旅をした際には、政代を伴って出発した。

ルートは「西遊草」の旅路と重なる部分が多い。

踏査隊は鶴岡市本町1丁目、医療法人理事二井圭子さん(69)方を訪ねた。ここでは数年前、江戸時代の女性が残した貴重な道中記が見つかった。先祖に当たる二井清野という人で、八郎親子の伊勢参りより38年前の1817(文化14)年に日光、江戸、伊勢、京都、新潟などを旅行した。

作家の金森敦子さんが「きよのさんと歩く大江戸道中記」として出版。その内容から、清野が江戸の庄内藩邸を見学させてもらったり、遊郭見物や大量の買い物を楽しむなど豪華な旅をしていたことが分かる。

清野の家は、二井弥惣右衛門の屋号で栄えた豪商。清河八郎の清川の生家斎藤家と縁が深く、清野の母は斎藤家から弥惣右衛門家に嫁いだ。それだけでなく八郎の母亀代と伯母の政代は清野の妹の娘で、弥惣右衛門家は亀代の実家の本家に当たる。

踏査隊は清野の道中記の原本を見せてもらった。圭子さんは「初代弥惣右衛門はもとも伊勢商人だった。別の道中記もあり、清野の娘も長旅をしたらしい」と話す。

「実際に歩いてみると、西遊草には書かれていない八郎周辺の人物像が浮かび上がってくる。収穫は大きい」と矢口さん。踏査隊は鶴岡市の中心街を離れ、湯田川温泉を目指した。

(文)鶴岡支社・伊藤哲哉、写真)同・色摩高幸